

カガヤキ

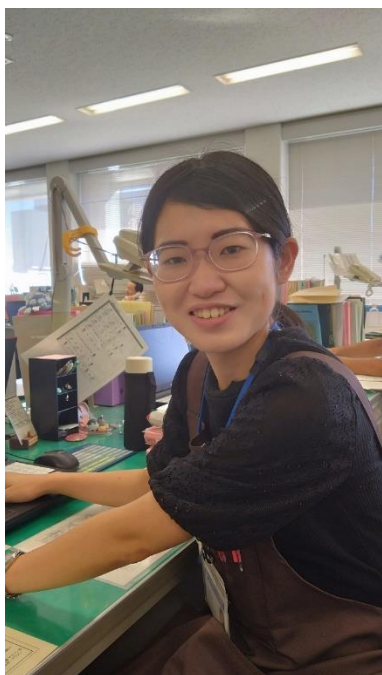
暫定的補足表題「ウオランタス」
ラテン語でボランティアの意

No.73(2023.9.15 刊行)、広報委員会編集

茨城県立図書館発行
禁複写転載©広報委員会

図書館利用者の変化傾向と対策

館内サービス課 古木 茜



古木さん

昨年度、県立図書館に赴任してきてまず驚いたことが、地元の市町村立図書館と比べて利用者がとても多いことでした。この

度、標記のテーマで執筆依頼を受けた際、その時の驚きを思い出しました。

令和3年度は開館1日あたり約1300人の方に県立図書館へご来館いただきました。実は、この人数は県立図書館の過去の来館者数と比べると少ないものとなります。開館当初の平成14年度は開館1日あたり約3000人もの方にご来館いただけていたようです。

入館者数は平成15年度をピークに年々減少傾向となっております。特に、令和2年度はコロナ禍やカフェ整備休館があったことにより、前年度の入館者数から6割以上減少しています。

入館者数等減少の原因として、平成29年3月31日付「茨城県立図書館としての資料収集について（建議）」では「第一に、図書購入費の減によって、ベストセラー等の一般書から調査研究用の専門書に蔵書構成の比重が移ったこと。第二に、近隣市町村において図書館数が増加したこと。第三に、情報通信ネットワークの普及により、手軽に情報を入手できるようになったこと」が挙げられています。

しかし、令和3年度後期には、入館者数に増加の兆しが現れ始めます(文末のふたつの表参照)。

令和5年4月28日付「県立図書館における情報発信のあり方について（建議）」では、入館者数増の一因に令和3年7月にオープンした星乃珈琲店を挙げており「令和3年10月以降は令和元年度と同程度の入館者を確保しており、カフェ整備及びハード面の整備には一定の効果が認められ、総合的に、カフェの設置とそれに伴う一連の取り組みは、近年の入館者の減少傾向に歯

止めをかける要因になったものと思われる」と述べられています。

星乃珈琲店内には県立図書館の新着図書が展示されており自由にご覧いただけます。また、館内の書架に並んでいる図書を店内に持ち込み、ご覧いただくことも可能です。珈琲を片手に、きっと優雅なひと時を過ごせると思います。

さて、今後より多くの方にご来館いただくために何が出来るでしょうか。

現在、県立図書館では、郵送での利用カード登録や遠隔地貸出サービス(ぶっくびん)等により、来館せずに図書・雑誌資料をご利用いただくことができます。また、レファレンスサービス(調査・相談)も、メール等の方法でも受付し、調査のお手伝いをしております。

このような状況下で、皆様にご来館いただくためには、来館ならではのサービスを実施した上で、積極的に広報することが必要と考えます。

広報については、令和5年4月28日付「県立図書館における情報発信のあり方について(建議)」でも課題に挙げられており、「県立図書館はどこにあるのか、どのようなサービスを実施しているのか、なんとなく水戸にあるかもしれないが、詳しい場所やサービスはわからないという県民は多い。このような中で図書館サービスと県民ニーズを繋ぐためには、適切な広報により一層の利用促進が可能と思われる」と述べられています。

せっかくの機会ですので、本稿では来館してお楽しみいただけるサービスとして、令和4年度図書館利用者アンケートで「利用したことがない」と48.9%の方が回答し

た「視聴覚ホール等のイベント」について、紹介したいと思います。

県立図書館では、視聴覚ホールや会議室で様々なイベントを行っております。8月に実施したイベントのタイトルは「高校生のためのビジネスプラン講座」「くらしの困りごと無料相談会」「世界のボードゲームで遊ぼう!」等、図書館のイメージからは意外に思われるジャンルのイベントがあるかもしれません。

今年度からは文化・芸術・学問等、教養の発信基地としての機能を強化するため、多方面の関係機関と連携して、「知の探究セミナー」と称した講演会やセミナー等を開催しております。8月には、星乃珈琲店認定コーヒーマイスターによる珈琲店ドリップ講座「アイスコーヒーの淹れ方」やJAXAから講師をお招きして「宇宙飛行士になるには?」講演、「ブックディレクターによる「新しい仕事の作り方」」講演等を実施しました。

今後の実施予定は県立図書館HPや館内のポスターにて公開しておりますので、ぜひご参加ください。

また、イベント開催の前後の期間には、イベント内容に関連した図書館資料を1階ギャラリーや1階大階段下、2階ホール前等に展示しております。イベントに参加して興味を持った事柄に関して、図書館資料でもっと深く学ぶことができます。もちろんイベントに参加されない方も、展示された資料を閲覧・貸出いただくことが可能です。利用者の方にとって、資料の展示が新たな資料と出会うきっかけになれば嬉しい限りです。

これからも、県民の知の拠点として様々な

情報発信をし、「来館してよかった。また来たい」と皆様に思っただけのような図書館を目指したいと思います。

開館 1 日あたりの入館者数比較
(7月-1月、R1, R2, R3 の 3 ヶ年)

単位：人

年間入館者数と開館 1 日あたりの入館者数の推移 単位：人

年度	年間入館者数	開館 1 日あたりの入館者数	R1	R2	R3
H14 年度	891727	3075	7 月 1384	553	1588
H15 年度	906935	3138	8 月 1541	0	1470
H16 年度	873736	3003	9 月 1356	522	1129
H17 年度	814635	2829	10 月 1221	626	1199
H18 年度	727517	2517	11 月 1460	770	1537
H19 年度	676657	2333	12 月 1243	738	1254
H20 年度	637116	2189	1 月 1296	682	1267
H21 年度	590037	2014			
H22 年度	543990	1964			
H23 年度	257574	1552			
H24 年度	462593	1590			
H25 年度	458414	1581			
H26 年度	432536	1512			
H27 年度	426341	1435			
H28 年度	434908	1479			
H29 年度	425604	1448			
H30 年度	409144	1392			
R1 年度	375982	1329			
R2 年度	133340	734			
R3 年度	232184	1312			

選書に過程について

情報資料課 田村 彩



会議の様子

今年4月に県立図書館情報資料課に異動となり、5ヵ月が過ぎようとしています。少しずつ慣れてはきましたが、まだまだ覚えなければならないことも多く、新規採用職員のような気持ちで日々の業務にあたっています。図書館の業務は、想像以上に多岐にわたり、その運営にご協力いただいておりますボランティアの皆様、この場を借りてお礼申し上げます。

さて、情報資料課の主たる業務のひとつが「選書」です。今回は、図書館にある一般図書資料がどのように集められているのかをご紹介します。県立図書館では、選書にあたり、分野ごとに五つの予備選定班（ブロック）に別れています。一般図書、児童書及び郷土資料です。一般図書は、自然（0 総記 4 自然科学 5 技術 6 産業）、人文 A（1 哲学 2 歴史 3 社会科学）及び人文 B（7 芸術 8 言語 9 文学）の三つのブロックにより、それぞれの分野の選書を担当しています。各ブロック 3-5 人程度のグルー

プ構成で、情報資料課と館内サービス課の職員が担当しています。寄贈本の受入れについては、週1回のブロック会議により現物を確認し、決定します。

選書の主なツールとして、図書館流通センターの「週間全点案内」を利用しています。1冊あたり平均1200冊の新刊資料の情報が掲載されています。国立国会図書館のように、すべての出版物を収集できることが理想ですが、所蔵数や予算には限りがあるので、収集方針や利用者及び市町村の要望を考えながら、資料を選ぶという作業になります。

「週間全点案内」をもとに、各ブロックのメンバーが予備選定を行います。その際まず考慮することが、資料収集方針及び選定基準です。県立図書館では、社会の動向と、利用者のニーズを反映させるため、毎年重点的に収集する分野を設けています。令和5年度は、五つの重点テーマ（1：ビジネス 2：法律 3：情報科学 4：次世代育成 5：暮らしを楽しむ）を設け、このテーマに関する資料について、積極的に収集しています。重点テーマ4及び5については、カフェ開設に伴い、利用が増加した若年層やミドル層向けとなっており、入門書や読み物的な親しみやすい資料を選定しています。従来県立図書館では、専門的・学術的な資料や、調査研究に用いる参考資料を系統的に選書していました。近年は、この専門書・参考資料と、利用頻度の高い市町村向けの資料をどのようなバランスで購入するかが、課題のひとつになっています。

選書の際には、資料の内容だけでなく、シリーズとしての所蔵状況や旧版の有無、

類書の利用状況も重視します。その著者の資料が図書館にあるか、所蔵があるとしたら、どのくらい利用されているか、同じ内容の資料がどのくらい所蔵されているか、所蔵されている最新版がいつ発行されたものかなどを考慮し、総合的に判断していきます。予算だけでなく、時間的な制約もあるため、ある程度のスピードも要求される作業です。毎週木曜日に書架整理の時間があるのですが、その際に実際に自分が担当するブロックの整理を行いながら、資料の所蔵の状況を確認します。視覚的にみることで、おおまかではありますが、分かることがあります。

購入の判断に迷った時には、「茨城県図書館情報ネットワーク」や「国立国会図書館サーチ」を利用し県内市町村や県外公立図書館の所蔵の状況を参考にしています。図書館に勤務するまでは、まったく知らなかったツールですが、選書の際には、とても役に立つ機能です。選定業務に携わるようになってから、書店でも、平積みされている本や特集、ベストセラーランキングなどに目がいくようになりました。情報のアンテナをはるように日頃から心掛けています。その他、書評新聞も参考にしています。ジャンルは、多岐にわたり、小説のみならず、哲学や思想、芸術などを専門的に扱っており、執筆者には大学の研究者も多く登場しています。

また、県立図書館ではリクエスト制度を設けており、そのリクエスト本に対する選定があります。利用者は、一人月3冊まで、図書館で購入してほしい本をリクエストすることができます。市町村からのリクエストも受け付けています。市町村におい

て購入が難しい資料について、県立図書館で購入し、相互貸借で貸出を行っています。資料が高額である、専門性が高く利用が限られることなどが主な理由です。リクエストについては、利用者のニーズに直接応えることができる制度であり、市町村支援にもつながるため、品切れや一般書店に流通していない等の理由で購入できない場合を除き、できるかぎり応えていきたいと考えています。

このようにして各ブロックにより検討された選定結果をもとに、月一回選定会議にて審議を行い、購入する資料を決定しています。今年度は、県教育センターとの事業として、指導主事が選定した学校教育に関する資料を県立図書館が購入、展示する企画が進行中です。学校現場での経験を活かした、ニーズの高い資料が提供できると考えています。

日常生活の中で何か困りごとができたとき、何かをより深く知りたいと思ったとき、本は様々な情報や知識を提供してくれます。ふと時間ができたとき、思いのままに手に取った本から、新しい楽しみが見つかるかもしれません。図書館に並んでいる本は、読まれてこそ価値を生むものです。県民の多様なニーズに応えることができるように、そして図書館が、生涯を通じた学びを支える一助となれるように、努めていきたいと思ひます。

大切な本と出会うということ

東大名誉教授・元日本宗教学会会長
島 蘭 進

仕事のための読書

人文社会系の学者として長く過ごしてきたので、本を読むのが仕事の多くの部分を占めています。たくさん本を読んでいることが学者の実力の基盤となります。そこでせっせと本を読む時間が多い人生となりました。

まずは自分の専門分野の必読書は読んでおかなくてはならない。マックス・ウェーバーはプロテスタンティズムについてどう捉えていたのですかと聞かれたら、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』という本には、これこれこういうふうに書いてあります、と説明しなくてはならない。

ウェーバーはなぜキリスト教のプロテスタントをそんなに重んじたのでしょうか。他の宗教についてはどう見ていたのでしょうか。それまで講義で話すためにはさらに多くの書物に目を通さなければなりません。こんなふうに次から次へと「読む必要がある本」が出てきて、それに忙しく追い回されるわけです。

必要だから読むのではない読み方

でも、これは自分にとってほんとうに意義ある読み方でない、また、楽しんで本を読んでないよね、という意識がずうっとあ

ります。というのは、必要だから読むのではなくて、読みたいから読むというのが、本来の本の読み方だと思っているからです。

専門家としてこれだけの本を読んでおり、十分な知識をもっており、信頼に値する情報を提供しています。ここまでしっかり調べてあるので、述べていることは確かです。というわけですが、ときには資料の博搜ぶりを示し、「ドーダ」と見せびらかしたりするようになります。学問は「卓越（エクセレンス）」を競うわけですが、他者の誰にも負けない読書量を誇ることが目標のように見えることもあります。

日頃、業績主義が行きすぎた現代社会のあり方に疑問を投げかけることが多いのが、私の立場です。あらゆるものを数値で比較し、数値で比較できるものこそが価値の源泉であるかのように見る考え方は、人が生きていく上で大切なものを見失ってはいないか。そう感じているのです。そうではない価値がある。数値化できるようなものでは表せない尊いものがある。そのことを見失わないような社会のあり方を示すことに人文社会系の学問の役割がある、そう考えているわけです。

心の糧になる読書

実際、「仕事の必要」から解き放たれた心をもって読みたい本というものもあるでしょう。世の中には、余暇にこそ読みたい本があるという人も少なくないはずですが、それは娯楽のため、気晴らしのためかもしれません。映画やまんがもそうかもしれませんが、楽しいものこそを見たいという、そ

ういう気持ちで本を読む人がいるでしょう。そのなかには、心の栄養になる、生きていく力になる、いのちの糧になるというような動機と近いものもあるでしょう。

そういえば、音楽については、好きな音楽を楽しむときに、業績主義的な動機が作用することはさほど多くはないのでしょうか。社会人のためのクラスで、「あなたが悲しいときに聞きたい曲」、「親しい人が悲しいときに聞かせてあげたい曲」をあげてもらい、それを材料に話し合ってもらったことがあります。クラシックから歌謡曲、ジャズからポップスまで、実にさまざまな曲の名前が出てきました。そしてなぜその曲なのかを話し合ってもらったところ、たいへん盛り上がりました。本との出会い

では、本についてはどうでしょう。心の栄養になる、生きていく力になる、いのちの糧になる、そんな本があるといいですね。そういう本を探す、見つける、深く読み込む、そんな時間があると良いのではないのでしょうか。

そういう本があったとして、人生の途上でまた変わっていくのではないのでしょうか。たとえば、キリスト教徒が聖書を読むというように、一つの本を繰り返し読み続けるということもあるでしょう。聖書だったら、さまざまなものが入っているから繰り返し読み続けることができるでしょう。夏目漱石や宮沢賢治が好きだという人も、その作品がいくつもありますので、これまでとは違う別の作品の魅力に出会ったというような経験があるかもしれません。

また、親しい人を喪うというような経験を経たり、仕事の上で苦しい問題にぶちあ

たるというような経験を経て、揺らぐ心の支えになる本に新たに出会うというようなこともありそうです。そんなとき、ふと書店で目に止まったり、図書館で触れたりして、後から、心の栄養になった、生きていく力になった、いのちの糧になった本に出会うということもあるでしょう。

そのような本と出会うような読書の時と場所がほしいものです。そして、そこでは偶然とか、思いがけずという要素があるのではないのでしょうか。ふと目に止まったとか、何気ない会話のかでふと心に残る本について聞いたとか、というきっかけです。また、そんなことは期待せずに読んでいるうちに、いつしか深く引き込まれ、読み終わったら自分にとって忘れられない大切な本になったということもあるでしょう。

さまざまな図書館の可能性

図書館はそんな出会いにつながる場であってほしいし、事実、そうなっていることが多いのではないのでしょうか。もちろん必要な情報を得たり、調べ物をするために利用したり、本を借りたりすることも図書館の大事な働きです。

しかし、大切な本に出会うということが起こるような、あるいは起こるきっかけを提供するような図書館があってほしいと思います。そのような図書館があることは、コミュニティにとって豊かな資源となります。いのちの糧を提供する施設という側面です。

加えて子どもや青少年のための図書館というのもあるとよいですね。学校の図書館はそのような働きをもつ可能性がありま

す。ですが、地域にもそのような図書館、図書室があるとよいでしょう。東京子ども図書館（江古田）はそうした試みの拠点となっています。

シャンティ（曹洞宗ボランティア会）という団体は戦争で荒廃した東南アジアの地域に、生活物資を送る以上に、子ども用の図書を送ったり、移動図書館を作ったりしました。図書館の働きについて考えるヒントがある事例だと思います。

視聴覚資料 G の立ち上げ経験

広報 G 桜井 淳

茨城県立図書館のボランティアのひとつとして視聴覚資料 G(活動内容は、視聴覚資料の点検、複写、試聴など)が設置されたのは、5年前のことでした。

形式が整い、スタートしたもの、コロナ禍での活動制限なのか、それとも明確な供給と需要の把握のない状態での設置に起因するものなのか、明確なことは分かりませんが、開業閉店状態が続いていました。

私は、広報 G の委員長の立場で、原因を明確にした上で、再度、メンバーと委員長を募り、活動を軌道に乗せなければならぬと考え、今年度に入ってから、図書館側の担当者と連絡を取り、この先、どのような方針で進めたら良いのか、話し合ってきました。

私は、開業閉店状態の広報 G を再建し、レベルの高い通信紙の編集を実現した経験から、開業閉店状態の視聴覚資料 G の再建のため、もう一度、再建作業を担当したいと考えるようになりました。

図書館担当より

県立図書館のボランティアは、社会的貢献を目指す志の高い方々に集まっています。ボランティア登録時に行う簡単な面談では、その意欲に触れることができ、担当としてもうれしく思っています。

今回の視聴覚資料ボランティアのみなさまの退会に当たりましてはふたつの原因が考えられます。

一点目は、コロナ禍により、ボランティアの皆さんの活動の機会が減少したことが挙げられます。新型コロナウイルスが猛威を振るい始めた令和2年度は、感染症対策のため、ボランティア活動自体の縮小をせざるを得ませんでした。せっかくの活動の場が奪われる形になったことも一因としてあるかと思います。

二点目は、業務内容が減少したことが考えられます。視聴覚資料 G ボランティアには、視聴覚教材（CD、DVD、カセットテープや VHS ビデオテープ等）の品質管理として、傷の確認や再生可能かどうかなどを実際の視聴を通してチェックしてもらっておりました。しかしその作業も、カフェ増設に伴う工事による休館などが重なり、図書館職員で対応できてしまうこともあったかと思われます。

いずれにせよ、コロナ禍の時代背景はあったものの、仕事の割振りや、新規作業の開拓などが図書館側で手薄になり、結果ボランティアの方々に有意義な活動の場が提供できなかったことが原因と思われます。

再建の際には、当事者同士での情報交換をしっかりと行い、協働的な場の設定に努めたいと考えます。

私の生成会話型 AI との会話経験

広報 G 桜井 淳

はじめに

私は、仕事で、AI(Artificial Intelligence)を頻繁に利用していますが、利用分野は、

- ・ 検索機能による事実関係の確認(90%)、
- ・ AI の特性把握のため、俳句や小説の執筆依頼(5%)、
- ・ AI の特性把握のため、ジョークの作成依頼(1%)、

などであり、まだ、AI の特性(そなえている固有の癖)を十分に把握しているわけではなく、悪戦苦闘中です。

私は Chat GPT(GPT とは生成学習型変換の意)と Microsoft Bing AI の相違について調査しました。Chat GPT と Microsoft Bing AI は、異なる目的と特徴を持つ対話型 AI。Bing AI は、検索エンジンとしての機能を持ち、最新の情報や画像を生成でき、Chat GPT は、創作物の執筆や雑談など、想像力や表現力に優れています。Bing AI は、会話のスタイルを「独創性」「バランス」「厳密」の3つから選ぶことができますが、Chat GPT は会話のスタイルを選ぶことができません。

AI に小説執筆依頼

私は、いつものように、AI 機能研究のために、Microsoft Bing AI(設定「厳密」)に、分かり切ったことですが、意思疎通の

ため、さらに、癖を知り尽くすため、改めて、「東大生の男と女の恋の物語の小説を書いてください」、結果を見て、さらに、「もっと長くしてください」、さらに、「もっと微妙な心の移り変わり葛藤まで入れた長い小説にしてください」とやり取りしたところ、

彼女の名前は美咲、彼の名前は健太。二人は東京大学の学生で、同じクラスに所属していた。美咲は文学部の学生で、健太は理学部の学生だった。

ある日、美咲は図書館で勉強していると、隣に座っていた健太が声をかけてきた。彼は美咲が読んでいる本に興味があったのだ。二人はその日から、図書館でよく話すようになった。

やがて、二人はお互いに惹かれ合うようになり、デートをするようになった。美咲は健太の知的な話し方や、彼が持っている深い知識に惹かれていた。健太もまた、美咲の優しい性格や、彼女が持っている豊かな感性に惹かれていた。

二人はお互いを支え合いながら、大学を卒業し、社会人としての新しい人生をスタートさせた。そして、二人は結婚し、幸せな家庭を築いていった。

しかし、結婚生活も順風満帆ではなかった。仕事のストレスや家庭内の問題が重なり、二人の間に溝ができてしまった。美咲は健太が仕事に熱中しすぎて家庭を顧みなくなったことに不満を感じていた。一方、健太もまた、美咲が自分の仕事を理解してくれないことに苛立ちを覚えていた。

二人はお互いを信じ合い、助け合いながら乗り越えていった。そして、二人は子供

を授かり、家族が増えることでさらに幸せが増えていった。子供たちもまた、東京大学に進学し、二人の足跡を辿ることとなった。

彼らの物語は、東京大学という場所で始まり、そこで出会った二人がお互いを支え合いながら成長していく姿を描いています。愛と信頼があれば、どんな困難も乗り越えることができることを教えてくれます。

なる回答をえました。

考察

私は、AI の書いた小説を読み、小学生の遠足の作文のように、時系列のみしか記していないように感じ、深く失望し、何とか良い内容にできないものかと、微妙な表現まで含めるように要求しましたが、AI に無視され、実現できず、そのことは、私が、まだ、AI が小説を書くことに対する理解が不十分で、AI の潜在的な小説作成能力を引き出せない結果かもしれないため、今回の結果を参考に、今後、AI ともっと多く会話して、オリジナリティの高い長い小説になるようにしなければなりません。

私の仕事は、主に、自然科学や社会科学の既存知識の事実関係の確認とそれらの知識から自身のオリジナリティを組み込んだ体系を構築することであり、Chat GPT よりも、Microsoft Bing AI の方が、目的に適しています。

Chat GPT や Microsoft Bing AI などの

AI が誕生してから、わずか、8 ヶ月 (2023.8.13 現在)しか経っていませんので、私のこれまでの経験から言えることは、Microsoft Bing AI は、

- ・ 検索での事実関係の確認において、10 % くらいの誤りがあり、利用者には、それを正せる能力が必要であり、
- ・ 論文や著書の内容の要約はしますが、良いか否かの評価は、意図的に避け、各自の判断に求めており、
- ・ 判断が、八方美人的であり、当たり障りのあることに対し、意図的に避ける、
- ・ 社会的に不都合なこと(振り込め詐欺や殺人など)に対しては、死んだ振りをする(機能停止)、

などであり、うまく付き合い、意思疎通しながら信頼関係を増し、誤りについては、教育し、時間をかけて良い結果になるような相互信頼関係の構築が必要のように感じました。

結びに代えて

AI を利用する上で最も重要なことは、最初から、AI の回答だから正しいと鵜呑みにせず、文章を吟味し、どの箇所が間違っているのか、その原因が何なのかを解説でき、正せるだけの能力が欠かせません。

AI による事実関係の確認は、AI 構築者のデータベースの選択の範囲内での検索であり、データベースにないことや誤りについては、そのまま、検索結果に反映されますから、そのことを認識しての自己責任で利用することです。

大変、僭越ですが、専門分野では、AI が、私より上と言うことはありません。

編集後記

私が編集を担当してから 8.5 年になりますが、より読みやすく、著者と読者の距離をなくすため、今回初めて、全体を「です・ます調」で統一しましたが、読者の意見を参考にし、今後の方針を決めたいと思います。

古木さんの原稿を読み、感じたことは、全国的に共通する図書館離れ現象であり、県立図書館の利用者数は、過去 20 年間、減少の一途をたどっており、古木さんは、具体的な数字を示し、その原因と対策について言及しています。

田村さんの原稿を読んで感じたことは、文章がうまく、論理展開がうまく、分かりやすいことであり、そのような文章が書ける人は、少ないように思えます。

県立図書館の図書選定委員会は、県立図書館の管理職と図書選定担当職員から構成されていますが、私の図書選定についての認識は、県立図書館・ボランティア全体会合における職員の自己紹介の際、各々の業務内容についての言及の中で、「何々分野の図書選定にかかわっています」なる言葉から、何歳くらいの人が、どのような課で、どのようなかかわり方をしているのかの把握程度でしたが、田村さんの原稿から、詳細事項の把握ができました。

島菌先生は、東大での私の宗教学の先生であり、宗教学のみならず、社会と宗教の関係を考察する「宗教社会学」を基に、国内外で発生した問題(少し古いことですが、オウム真理教事件の社会的背景、最近では、東日本大震災の犠牲者の霊的意味や

統一教会問題など)に対し、積極的に、問題提起しており、これまで、「政府脳死臨調」や「世界平和アピール七人委員会」や「市民原子力委員会」の各委員などを務めてきた現代社会の頭脳的役割を担っており、原理原則を尊重する時代を切り拓く哲学者でもあり、原稿執筆依頼にも快く応えていただき、通信紙としての約束事や統一性という問題もありましたが、それらにすべて目を瞑り、掲載し、島菌先生には、本の読み方、図書館利用者に、利用しやすく、あるべき機能などについて、提言していただきました。

私は、わずかばかりの AI 利用経験を記しましたが、AI と人間の相互比較において、各々、優れたこととそうでないことが存在し、AI は、高速コンピュータによる決められたデータベースの検索のため、データベースの信頼性が高ければ、それなりの結果がえられ、速く効率的な作業には適していますが、あくまでも機械的な処理であり、推論に弱く、それに対し、人間の優れたことは、速さでは AI にはかなわないものの、前後関係からの推論や雰囲気や機微な表現から隠された意味を読み取ることなど、AI にはできないことができ、総合的に評価すれば、人間が AI に負けることはなく、相互の得意分野を生かした相互協力による共存が、ベストな未来だと思いますが、今年度の通信紙の編集は、すでに、4 回目であり、順調に推移しているように見え、改善点は、全体を「です・ます調」に統一したこと、図書館側とボランティア側と第三者有識者の原稿をバランス良く配したことなどです。

桜井 淳